河童・ふぁっしょなぶる

サンショウウオ

店の戸に付けられた鈴が鳴ったのでそちらを振り向くと、見慣れた少年が立っていた。
「いらっしゃい、河野くん。のびてきたね、髪。いつもの感じに切ろうか」
「親父さん」
いつものように少年――河野君に話しかけると、彼は常とは異なった深刻な顔で私をまっすぐ見ていた。
「俺、皿を取ろうかと思う」

「で、どうしたんだい？」
河野君を椅子に座らせ、我ながら慣れた手つきでケープをかぶらせると、彼のお気に入りの瓶のキュウリラムネを持たせた。冬はホットキュウリ、夏はキュウリラムネというのが、彼のお決まりである。
「決めたんだよ、今回こそは皿をとるって」
「まあ、別にそれはかまわないけどね。こちらとしては二千円儲かるわけだし」
彼の触り慣れた髪をとかしながら、その頭の上にのっかった、ちょっと日焼けしている皿をちょんちょんとつつく。
「おじいさんとの約束は？」
「別に、約束ってわけじゃないよ」
少しすねた様子で、河野君はキュウリラムネをポンと開ける。
「それに、じいちゃんの好みに合わせてってわけじゃない。これまでとってなかったのは、俺自身の矜持だったから」
矜持、とは、最近の中学生はずいぶん難しい言葉を使うものだ。
「その矜持とは、折り合いがついている感じ？」
「……多分」
「多分かあ」
河野君の言葉を繰り返しながら、これは少し複雑そうだぞ、と思った。頑固でまっすぐな、河童少年河野君。彼が初めて私の床屋に来てから早十年ほど。これまで、彼がこんなに曖昧な物言いをすることはなかったのだから。
河野君のお家はもう何百年も続く純河童一族で、〝しりこだま〟販売を生業とする名家らしい。ありがたいことに、河野家はうちの床屋をひいきにしてくださり、河野君のお父さんも叔父さんもお祖父さんもちょくちょくお会いするが、確かに見事な河童であった。
「じいちゃんは何百年も続く一族の矜持がどうのとかいうけど、これは俺自身のだから」
「なるほど」
とりあえず、はさみを入れるのは延期にして、彼の髪をひたすらコームでとくことにした。先ずはお客様の要望をしっかり聞く。河野君に合わせて言うなら、それがうちの店の矜持だ。
「皿をまんまのせてんのはダサいって言うのが今の基本じゃん？」
「そうだね」
「クラスの子達も、ほとんど皿を取るか、縮小するかしてるし」
「うちもそういうお客さんが多いなあ」
河童は皿が割れると死んでしまう、などというのは今となっては昔話だけの話。昔は水分保有が難しい河童は確かに水分補給機関を要したが、様々な技術の発展と河童自身の進化により、彼らは一週間に一錠の薬を飲むこ

とで、その制約から解放されていた。
よって、重く、扱いにも気をつけなければいけない皿を頭にわざわざのせることは不要となり、さらに皿はなんだかハゲのようでダサいという風潮が広まったため、現在では多くの河童は皿を取っている。
床屋から見ても、皿は確かに髪型を変える上でもなかなか邪魔であり、皿撤去施術が結構簡単にできることからも、お客様に皿の撤去を勧めることは多かった。
「ただ、皿は一度取ると、元の大きさのものをもう一度生やすのに二年くらいはかかるからね」
「わかってる。結構しっかり考えたんだよ、ずっと大事に手入れしてきた皿なんだし」
「河野君は毎日保湿してるんだよね、ひびも入ってなくてきれいだよ」
「だろ！」
鏡の中で、河野君は得意げに笑みを浮かべる。しかし、ハッとしたようにそれを消してキュウリラムネをもう一度口に含んだ。
「でも、もういいんだよ」
「なにか、きっかけがあったりしたの？」
「……」
河野君はまたキュウリラムネを握ったまま押し黙った。
河童の水補給の薬は、副作用の観点から小さい子どもにはあまり推奨されていない。だから、小学生低学年くらいはどの河童も皿をとらずにいることが多い。同い年の子供達が、口々に皿が邪魔だ、早くとりたい、早く大人になりたい、と言うのに対して、河野君はいつも自分の皿をなでて得意げに言っていた。
『おれは絶対とらないよ、皿。俺の大事な皿だもん。せっかく河童に生まれたんだから、昔の河童みたいに、皿を大事して生きるんだ！』
頑固な彼のその宣言は、きっとこれからもずっと続いていくのだろうと、思っていたのだが。
「昔の河童の絵を見るのが好きなんだあ、俺」
「うん」
「ご先祖様の写真とか見てると、皿って本当にそれぞれなんだなあって思えて面白いんだよね」
「うんうん」
ラムネを飲み終わってしまった彼は、いつもの様にキャップをとり、中のビー玉を取り出した。
「確かに皿は邪魔かもしれないけど、皿があるから、俺たちは生き残ってこれた、なんて研究もあるし。皿は俺たちの歴史を表してるってじいちゃんもよく言ってた」
「そうだね」
「でもさ、中学に入ってからさ……本当に、誰も皿付けてるやついなくなっちゃったんだよね」
河野君の声のトーンが落ちた。少し水かきのようなものがあるように見える手が、ビー玉をぎゅっと握りしめる。
「女子には裏でダサいって言われるしさ。あんなに、河野と一緒に皿ありで生きていくっていってた奴らも、皿とっちゃうし」
「あらら」
「まあ、いいんだよ。所詮口約束だし、心変わりってのは誰でもあることだから」
「そうか」
「嫌なのはさ、その中でやっぱり周りの皿なしの方がよく見えて、自分が大切にしてきたはずの皿がダサく見えて、こうやって自分の矜持を簡単に変えてみようと思えちゃう自分なんだよなあ」
河野君はふーっと長いため息をつくと、自分の頭を、皿ごとわしゃわしゃかき混ぜた。
「気にしなきゃいいだけなのに、自分の好きなものを貫けたらいいだけなのに、何やってんだろうなあ、俺」
彼はまっすぐだ。だからこそ、中途半端に曲がりくねろうとする自分が許せない。
曲がるなら思いっきり曲がる。まっすぐならまっすぐ。現代において少し変わった立場にいる河童ならではの、一筋であろうとする気合は、彼自身を縛ってしまっているのだろう。
ぐんにゃりしてしまっている彼にかける言葉がなかなか思いつかず、押し黙っていると、再び戸に付けたベルが鳴った。
「いらっしゃいませ」
「あの、ここってお皿の手入れってやってます？」
振り返って出迎えると、そこには河野君よりは年上に見える、女学生河童がいた。派手な髪色と短いスカートという、現代らしい若者の出で立ちである。
「はい、やっておりますが」
「よかったあ、最近お皿をデコるのが流行ってて、なのにお皿にひびが入ってばっかりで困ってたんですよう」
彼女はにっこり笑うと、自分の頭にのったまだ小さな皿をつついた。
「ついでに、手入れの仕方も教えてもらえたりとか」
「はい、俺！」
私が答える前に、背後で河野君が大きな声をあげた。
「俺、皿の手入れには自信あります！」
「え、本当？てか、だあれ、きみ」
いきなり手を上げて立ち上がった河野君に、女性は訝しげな顔をする。

「あ、えーと、彼は」
「皿好きの河童です！」
私が口を挟むより自己紹介をし、目を輝かせる彼の皿撤去は、当分延期になりそうだ。